

第 22 回対照言語行動学研究会（JACSLA22）研究発表 概要

2024. 10. 19 開催 於 東京科学大学

タイトル	「戦後日本の異文化・異分野コミュニケーション：理科教材の日本語訳から見る初期 STEAM 教育の試み」
著者名（所属）	野原 佳代子（東京科学大学 教授）
連絡先 E メール	nohara.k.aa [a] m.titech.ac.jp
<p><b>論文内容</b></p> <p>科学教育の思潮をたどる上で重要な資料に、第二次世界大戦直後 GHQ の指導のもと英語からの翻訳をともない編纂された理科教科書『小学生の科学』（1949）がある。起点テキストとしては米国発の教材が複数採用されているが、戦前日本で用いられていた教科書を下敷きとする創作らしき部分も織り込まれている。起点テキストのひとつに B. M. Parker 著作 <i>The Basic Science Education Series</i> (1941) があり、その内容は教育課程文庫『基礎科学教育叢書』に日本語訳され出版されたが、『小学生の科学』にもまた形を変えて継承されている。ひとつの起点テキストが、一方で逐語的に言語間翻訳され、もう一方では大胆な異記号間・異分野間翻訳の道筋を通り異なるテキストタイプを生んだ例である。</p> <p>中でも 5 年生対象の単元” Light” は、前者では「光のはなし」の章に訳され、翻訳ストラテジーとしては豊富なアプレイザル（評価）表現の追加により、特に科学的事実の扱いにおける「不安定化」「主体化」が目立つ。</p> <p>一方、後者の創造的翻訳に見られるダイナミズムは、言語テキストの談話分析と挿絵のイコノロジー分析により記述が可能である。起点テキストにはない対話形式による、好奇心旺盛な日本人少年と家族との明晰な会話のキャッチボールを通し、科学的事象のみならず登場人物の探求的・実験的なマインドセットが強調されている。また挿絵も大部分が目標テキストに固有と思われ、時代背景に則った内的な意味付けを試みると、合理性の象徴としての「父親」の発言を軸とした一家団らんにおける議論のモチーフとして据えられた、新しい理科の姿が垣間見える。教育の民主化と批判的思考の醸成がかねてよりの悲願であった日本人教育関係者らにとって、占領軍主導の翻訳プロジェクトは、介入・操作し理想のテキストを創造するまたとないチャンスであったかもしれない。戦後の初等科教育において必要とされた新しい理科の学びのあり方、そのニーズを「起点」としてテキスト化した点では間違いなく翻訳であると言える。この例は STEM（科学、テクノロジー、工学、数学）教育に、A（アート）を加えた STEAM 人材育成が注目を浴びる現代においても、知識集積重視の教育から、主体的かつ複数の解を許す STEAM という学びの形を探索する上で、ひとつの視座を提供するのではないか。</p> <p><b>参考文献</b></p> <p>板倉聖宣(2008)『科学と教育：教育学を科学にするための理論・組織』仮説社。</p> <p>Devetak, I., &amp; Vogrinc, J. (2013) “The Criteria for Evaluating the Quality of the Science Textbooks”, In M.S. Khine (ed). <i>Critical Analysis of Science Textbooks: Evaluating Instructional Effectiveness</i>. Dordrecht: Springer, 3-15.</p> <p>Erwin Panofsky (1939) <i>Studies in Iconology: Humanistic Themes in the Art of the Renaissance</i>. Oxford.</p>	